

アーガマにおける tri-yoga の定型表現

——ジャイナ教白衣派古聖典の本文の伝承——

渡 辺 研 二

1. はじめに

仏教、ジャイナ教、ヒンドゥー教では、身体で行う行為だけでなく、人が何か言うこと、また何かを思考することも、行為（カルマン）と考えられていた。仏教では、これを身口意の三業としてまとめ、仏典においては初期のものから後期のものにいたるまで様々な処に見られる表現である。一方、ジャイナ教でも初期の聖典のなかで、意・口・身の三種類の行為を認めている。用語も全く同じで仏教とは語の並びが逆になっているだけである。これをジャイナ教では tri-yoga（三つのヨーガ）と呼んでいる。これら身口意の三業を清らかに保つということは、ジャイナ教や仏教のみならず、インド古来の一般的な教えである。

2. ジャイナ教の表現

ジャイナ教聖典にみられる定型表現 *tiviham tivihenam* 「三様三種に」とは、「三様に」 *tri-karaṇa* に加えて「三種の」 *tri-yoga* の二つを合わせた表現であり、最初の *tiviham* は *tri-karaṇa* を意味し、それに続く *tivihenam* は *tri-yoga* である。*tri-karaṇa* は *Āyāraṅga* (*Āyār.*) の古い層にもすでに見え、早くからジャイナ教では特徴的な表現として存在していた。一方、*tri-yoga* の表現はジャイナ教古聖典の中では *Dasaveyāliya-sutta* (*Dasav.*) IV に至るまでは見られなかった。マハーヴィーラは、非暴力を主張するのに当たって、「三様に」 *tri-karaṇa* つまり、「自分で為さない、他にさせない。他が為しているのを認めない」といった3つの様式によって、口・意・身によって *ārambha*（生物を害する行為）を為さないように教えた。この「三様に」という *tri-karaṇa* の様式は、すでに *Āyāraṅga-sutta* I の前半の古層を代表する中に特徴的に見られる表現である。しかし、この最古の聖典には、身口意による *tri-yoga* はまだ現れていない。つまり、最古のジャイナ教聖典では *tri-karaṇa* の表現が先で、*tri-yoga* の表現は比較的后ということになる。*tri-karaṇa*

(236) アーガマにおける tri-yoga の定型表現 (渡 辺)

と tri-yoga は同時には登場してこないのである。一方、仏典には、身口意による tri-yoga が頻繁に現れる。しかも、仏典のうち古いとされる *Dhammapada* (*Dhp.*) には、「身口意による三種」の表現は見られるが、意外なことに最古の仏典とされる *Suttanipāta* (*Sn.*) には見られない(2カ所ではあるが、類似表現が見られる。(Sn. 330b, 365a.) そこで kāya- (身) が kamman に置き換わっている上、口・意・身と語順が違っており、全く同じ表現とは言えない)。この事実は、ジャイナ教聖典において「身口意による」tri-yoga の表現が *Uttarajjhāyā* (*Utt.*) や *Sūyagada* (*Sūy.*), *Dasav.* の古聖典には見られるが、最古の聖典 *Āyār.* の第1部には見られないことに対応する。

3. 身口意の三業の表現の語順

パーリ語仏典では、身口意の表現の「身により、語により、意により」の原文は統一的に *kāyena vācāya manasā* が知られている。単語の並ぶ順番は、身・口・意の順である。対照的にジャイナ教聖典は反対で意・口・身の順である。(Viyāhapannatti XVIII. 7-3 (750a) There are three kinds of 'acting' (pañihāṇa): mental (maṇa-p.), verbal (vai-p.) and corporealacting (kāya-p.) *pañihāṇa is nearly synonymous with joga- (by J. Deleu)) ただし、ジャイナ教の代表的な綱要書である *Tattvārthādhigama-sūtra* (*TS*) では、仏典と同じ「身・口・意」の順である。(kāya-vān-maṇaḥ karma-yogaḥ / sa āsravaḥ. *TS* vi. 1-2) 「身・口・意のはたらきはヨーガである。それが即ちアースラヴァ(業物質の漏入)である」ここにも *TS* の性格が表れている。すなわち、*TS* は「身口意」の語順に関してジャイナ教のアーガマの伝承よりも、外教である仏教の伝統に従っている。この箇所注釈は *ātma-pradeśa-parispando yogaḥ sa nimitta-bhedāt tridhā bhidyate, kāya-yogo vāg-yogo mano-yago iti.* (*Sarvārthasiddhi* : §§ 610-611.) と解説している。一方、サーンキヤの *Yuktidīpikā* (ed. R. Ch. Pandeya, Delhi 1967, p.123) ではジャイナ教と同じで「意口身」の語順になっている。ここにも仏教の「身口意」とは違う語順が見られる。

また、叙事詩 *Bhagavadgītā* v. 11a には、*kāyena manasā buddhyā* 「身体により、意により、知性により」という類似表現が伝えられている。

一般に、世間において人間は、心で思ったことは、言語として口に出るとともに、行為として身体によって表されるものである。この事実を素直に考慮すれば、仏教の身口意の語順よりも、ジャイナ教の伝える語順である意が先に来て口と身がそれに続く意・口・身の語の並びは、理屈の通った語順といえる。一方、ジャイナ教のマハーヴィーラは、非暴力を主張するのに当たって、「三様に」tri-

karana つまり、「自分で為さない、他にさせない、他が為しているのを認めない」といった3つの様式によって、ārambha (生物を害する行為) を為さないように教えた。この表現の内「自分で為さない」というのは、自分自身の身体を通して為さないのであり、「他にさせない」というのは口(言語)を通して他にさせないのであり、「他が為しているのを認めない」というのは行為を意(心)を通して認めないのである。これを考慮すれば仏教の「身口意」の語順にもある種の理由があるといえる。

この仏教とジャイナ教の両教における身口意の三業の表現の起源に関しては、学者の中には、仏教の表現をジャイナ教が取り入れたものである、などと主張する者もいるが、また逆にジャイナ教の表現を仏教が取り入れたと言う者もいる。しかし、その起源に関して仏教とジャイナ教の外に、両者に共通の源泉を想定することも可能であるが、未だ確かな証拠に基づいた説はないようである。これから提出する資料は、この問題に新たな光を当てることになるであろう。

4. ジャイナ教徒にとって必須の六種の日課を伝えるサーマーイカ (Sāmāyika) のアーヴァッサ式文の伝承の中に見られる tri-yoga の表現

Āvassa-sutta 2.11.34 (Jaina Āgama Series, 以下 JAS) の本文には有名なアーヴァッサ式文が伝えられている。

karemi bhante Sāmāyaṃ : savvaṃ sāvajjāṃ jogāṃ paccakkhāmi jāvaj-jīvāe tivaṃ tivaheṇaṃ : maṇeṇaṃ vāyāe kāyeṇaṃ na karemi, na kāravemi, karentaṃ pi annaṃ na samaṇujāṇāmi. tassa bhante paḍikkamāmi nindāmi garihāmi appāṇaṃ vosirāmi.

尊師よ、私はサーマーイカ行を為す。尊師よ、私は一切の非難されるべき行為を放棄す。生ある限り、三様三種に、意により、語により、身により、私は為さない、為さしめず、為しつつある他の者を認めない。尊師よ、これを私は告白し、これを非難し、後悔し、(過去の) 自己を捨て去る。(下線筆者)

Āvassa-sutta 2 (JAS) = 11.34 Sāmāyika-sutta

テキストでは「意により、語により、身により」の原文は maṇeṇaṃ vāyāe kāyeṇaṃ と表されている。一方、古注釈チュールニ (Cūrṇi) は maṇasā vacasā kāyasā という表現を伝えている。さらに、チュールニはこの読みと同時に注釈中に本文と同じ maṇeṇaṃ vāyāe kāyeṇaṃ の読みをも伝えている。すなわちチュールニは両方の読みを知っていたと考えられる。しかし、アーヴァッサの式文本文には maṇasā vacasā kāyasā を採用している。この箇所を平行する Digambara 版では maṇasā vaciyā kāyeṇa となっている。したがって、ジャイナ教には身口意の表現には3種類の読

(238) アーガマにおける tri-yoga の定型表現 (渡 辺)

みが伝わっていることになる。

現存ジャイナ教の聖典の身口意に関する三種の表現：

(Śvetāmbara) : maṇasā vayasā kāyasā

(Śvetāmbara) : maṇeṇaṃ vāyāe kāeṇaṃ

(Digambara) : maṇasā vaciyā kāeṇa

(Cf. Leumann, 1934, 6a)

今までの研究によれば、現存ジャイナ教白衣派古聖典には、本文の伝承に3種類ある。一つは現存ヴリッティに代表される読み（現在流通している本文で、現存の写本の異読は此の中に含まれる）、一つはプラークリット語の注釈チュールニの伝える本文、もう一つはヤーパニーヤ派の伝えるアーガマの読みの三種である。その他に、ジャイナ教全体としては空衣派の伝える本文がある。計4種類の本文が確認されている。

5. ジャイナ教聖典の五大誓戒の中の表現

ジャイナ教聖典の中でも、とりわけジャイナ教の教義を代表する特徴のある五大誓戒 (panca Mahavvaya) を叙述する、儀礼文 (liturgy) のなかに必ず現れる「意・口・身によって」という表現に関して、聖典の中では二種類の読みが現れることが観察される。

Dasav. IV. I

padhame bhante mahavvae pāṇāivāyāo veramaṇaṃ : savvaṃ bhante pāṇāivāyaṃ paccakkhāmi, se suhumaṃ vā bāyaraṃ vā tasaṃ vā thāvaram vā n'eva sayamaṃ pāṇe aivāejjā, n'ev 'annehiṃ pāṇe aivāyāvejjā, pāṇe aivāyante vi anne na samaṇujāṇejjā, jāvajjivāe tivihamaṃ tivihenaṃ maṇeṇaṃ vāyāe kāeṇaṃ na karemi na kāravemi karentaṃ pi annaṃ na samaṇujāṇāmi, tassa bhante paḍikkamāmi nindāmi garihāmi appāṇaṃ vosirāmi ; padhame bhante mahavvae uvatthio mi savvāo pāṇāivāyāo veramaṇaṃ. (ed. Leumann)

師よ、第一の大禁戒は、殺生を罷むる事なり。師よ。我れは一切の殺生を放棄す。その、或いは微細なるものも、或いは粗大なるものも、或いは動くものも、不動のものも、自から諸々の生類を殺害せざるべし。他の人々をして諸々の生類を殺害せしめざるべし。諸々の生類を殺しつつある他の人々をも認めざるべし。生ある限り、三種三様に、意により、語により、身によりて、我れは為さず、為さしめず、為しつつある他の者をも認めず。師よ。これを我れは自白し、これを軽蔑し、非難し、(懺悔に)自己を投ず。師よ。我れ第一の大禁戒に住す。一切の殺生を罷むる事なり。(松濤誠廉先生訳)

師よ、第一の大誓戒は、殺生を離れることである。師よ、私は一切の殺生を放棄する。微細なるものも、あるいは粗大なるものも、あるいは動くものも、不動のものも、自分

から生類を殺害することもない。他の人々をして生類を殺害させない。生類を殺しつつある他の人々をも容認しない。生きている限り、三種三様に、意により、語により、身によりて、私は為さず、為さしめず、為しつつある他の者を容認しない。師よ。これを私は自白し、これを軽蔑し、非難し、(懺悔に) 自己を投ず。師よ。私は、一切の殺生を離れ、第一の大誓戒に住す。(筆者試訳)

テキスト下線部の表現に対して、

Cūrṇi : maṇasā vayasā kāyasā

ところもまた、チュールニは異なった読みを伝えている。その内の kāyasā という読みは本来語幹 kāya- であり、-a 語幹の名詞であるが、前にある manas vayas の -as 語幹の曲用に影響された曲用の形である、と一般に説明されている。これに関してセーン教授もまた kāyasā は manas vayas の -as 語幹の曲用に影響された語形で方言であるといっている (*A Comparative Grammar of Middle Indo-Aryan*, Deccan College, Poona, 1960. § 59)。しかし、解説の中でセーン教授は、語の説明はほとんどせず、kāyasā がどの地方の方言かについては具体的に言及していない。プラークリット語の権威ピッシェル教授は、『プラークリット文法』の中で、この語形については様々な実例を列挙するが、特に解説をしていない。インドにおける方言を知り得るアショーカ王碑文にも kāya- の単語は現れない。したがって、この単語についてどの方言かの知識は他から得られないと思われる。ただし、*Utt. VIII. 10* の注釈の中でシャーンティスーリ (Śāntisūri) は 'maṇasā vayasā kāyasā ceva' tti āṛṣatvāt manasā vacasā kāyena と注釈している。ここでは kāyasā は āṛṣa であるから、本来は kāyena である、と解説している。ジャイナ教でアールシャ (āṛṣa) とは通常、聖仙すなわち聖者の語、アルダ・マーガディー語のことで、マハーヴィーラ自身はこの言語で説法したと言われるものであるから、kāyasā はマハーヴィーラの使用した東部インド方言の語形ではないか、とも考えられる。

この表現と平行になる聖典では、*Āyār. II* と *Dasav.* に平行する記述がある。ガタゲー教授によれば、この二つの平行記事は、*Dasav.* が古く、伝承本来の形を保持しているとされ、さらに *Āyār. II* の伝承は、新しく、原型の棄損が見られるとされている (A. M. Ghatage, *Parallel Passages in the Daśavaikālika and the Ācāranga*, *New Indian Antiquary* 1 (2), 1938. pp.130–137.).

Āyār. (JAS 777 ed. Jacobi) 132.1

maṇasā vayasā kāyasā (JAS) という *Āyār. Dasav.* チュールニと同じ読みを伝えている。

maṇasā vayasā kāyasā (Jacobi 132.1) *Āgamodaya Samiti* 216a. シーランカの注釈にはこの箇

(240) アーガマにおける tri-yoga の定型表現 (渡 辺)

所に関する解説無し。この部分については、*Āyār.* チュールニの注釈・解説共に無し。

6. ジャイナ教古聖典の表現

古聖典の他の箇所では、通常は *mañeṇaṃ vāyāe kāeṇaṃ* という文法に適った語形を示している。しかし、聖典の韻文の中には *kāyasā* という不規則形を保存しているものが散見される。

Dasav. (JAS) 289 bff = E.VI. 27ff., *Utt.* VIII. 10
maṇasā vayasa (sic.) *kāyasā*

Utt. VIII. 10d (JAS 218)
maṇasā vayasa (sic.) *kāyasā ceva*
と *kāyasā* の語形が保存されている箇所がある。

Sūy. 1.2.1.22. (JAS 110)
*vetāliyamaggamāgao, maṇa vayasā kāeṇa saṃvuḍo/
ceccā vittaṃ ca ṇāyao, āraṃbhaṃ ca susaṃvuḍe carejjāsi//*
He who has entered the road leading to the destruction (of Karman), who controls his mind, speech, and body, who has given up his possessions and relations and a 11undertakings, should walk about subduing his senses. (tr. by H. Jacobi)

Sūy. 1.8.6 (JAS 416)
*maṇasā vayasā ceva, kāyasā ceva aṃtaso/
ārato parato yāvi, duhā vi ya asaṃjatā//*
The careless (commit sins) by thoughts, words, and acts, with regard to this and the next world, both (by doing the act themselves and by making others do it). (tr. by H. Jacobi)

7. 仏典における身口意の伝承

仏典には身口意の表現は、頻繁に見ることができ、仏典最古とみなされる *Sn.* には、*kāyena vacasā maṇasā* の表現は見られず、類似表現として *Sn.* 330b, 365a に *vacasā maṇasā kammanā* という表現が見られるだけである。そこでは *kāya-* は *kamma* で表され、語順は通常の仏典とは異なって口・意・行為の順番である。

Dhp. における身口意の表現は次の 8 例である。：この用例は皆、具格 (身・口・意) + *sam√vr̥* の過去分詞、或いは *samvara-* との組み合わせである。この具格 (身・口・意) + *sam√vr̥* との組み合わせは、仏教 *Dhp.* 234, ジャイナ教の *Sūy.* 2. 1. 22 (JAS 110) に並行する表現が伝えられている。これは今までの対照表には載せられて

いない並行表現である。また仏教 *Dhp.* 361 とジャイナ教 *Utt.* XXV. 12, *Dasav.* X. 7 の対応と *Dhp.* 391 とジャイナ教 *Utt.* XXV. 22 の対応は、これもまた今までの対照表には載せられていない並行表現である。

***Dhp.* の用例**

Dhp. 225b : niccaṃ kāyena saṃvutā

Dhp. 231b : kāyena saṃvuto siyā

Dhp. 232b : vācāya saṃvuto siyā

Dhp. 233b : manasā saṃvuto siyā

Dhp. 234 :

kāyena saṃvutā dhirā atho vācāya saṃvutā
manasā saṃvutā dhirā te ve supariṣaṃvutā

Dhp. 281ab :

vācānurakkhī manasā susaṃvuto kāyena ca
akusalaṃ na kayirā

Dhp. 361 :

kāyena saṃvaro sādhu,

sādhu vācāya saṃvaro,

manasā saṃvaro sādhu

sādhu sabbattha saṃvaro

sabbattha saṃvuto bhikkhu

sabbadukkhā pamuccati.

Dhp. 391 :

yassa kāyena vācāya

manasā n'atthi dukkataṃ

saṃvutaṃ tihi thānehi

tam ahaṃ brūmi brāhmaṇaṃ

(身にも、ことばにも、
心にも、悪い事を為さず、

三つのところについてつつしんでいる人
かれをわれは〈バラモン〉と呼ぶ。)

(中村元訳)

ジャイナ教聖典の用例

Sūy. 2.1.22 (JAS 110) :

veyaliyamaggamāgao

maṇa-vayasā kāyena saṃvuḍo/

ciccā vittaṃ ca ṇāyao,

āraṃbhaṃ ca susaṃvuḍo care//

Dasav. X. 7d :

maṇa-vaya-kāya-susaṃvuḍe[je] sa bhikkhū

Utt. XV. 12d :

maṇa-vai-kāya-susaṃvuḍe sa bhikkhū

v. -vaya-

Sūy. 2. 1. 22b (JAS 110) :

maṇa-vayasā kāyena saṃvuḍo

Utt. XXV. 22 :

tase pāṇe viāṇittā

saṃgahaṇa ya thāvare

jo na hiṃsai tivihenaṃ

taṃ vayaṃ būma māhaṇaṃ

(動・不動の生きものをまとめて知って、
三種(身口意)によって、

殺さない人、

われらはその人をバラモンと呼ぶ。)

(筆者訳)

(242)

アーガマにおける tri-yoga の定型表現 (渡 辺)

ジャイナ教と仏教では、「悪い事」の典型は殺生である。パーリ語 *tihi thānehi* 「三つのところ」 (*Dhp.* 391c) とジャイナ教の *tiviheṇaṃ* 「三種」 (*Utt.* XXV. 22) は共に身口意を指している。その三つによって悪をなさない、そういう「理想の人格」を真のバラモンと呼ぶという、ウパニシャッドにも伝えられる「真のバラモン」伝承であるが、ここにあるような不殺生を守るのが真のバラモンという伝承はウパニシャッドには見られない。

以上の並行表現からジャイナ教の意・口・身と仏教の身口意の表現の源泉となるものは具格 (身口意) + *saṃ√vr* の過去分詞、或いは *saṃvara-* との組み合わせに辿れるのではないか、と予想される。

 〈参考文献〉

- E. Leumann, Übersicht über die Āvaśyaka Literatur, aus dem Nachlaß hrsg. Von W. Schubring. *Alt- und Neu-Indische Studien* 4, Hamburg, 1934.
- Śrīmaj-Jinadāsa-gaṇimahattara-kṛtayā sūtra-cūrṇyā sametaṃ śrīmad-Āvaśyaka-sūtram*, I, ed. Ānandasāgara sūri, Rsabhadevaji Ksarimalaji Śvetāmbara Saṃsthā, Ratlam, 1928–29.
- Śrīmad-bhāvaviraha-Haribhadra-sūri-sūtrita-vṛtṭy-alaṃkṛtaṃ śrīmad-Āvaśyaka-sūtram*, I, ed. Āgamodaya Samiti, Bombay, 1916–17.
- Sn.*: *Suttanipāta*, ed. by Andersen and H. Smith, Pali Text Society, London, 1965.
- Utt.*: *The Uttarādhyayanāsūtra*, ed. By J. Charpentier, Archives d'études orientales v. 18, Uppsala, 1922.
- Sūy.*: *Sūyagaḍaṃgasuttam*, *Jaina-Āgama-Series* 2 (2), ed. by Muni Jambuvijaya, Bombay, 1978.
- Dhp.*: *Dhammapada*, ed. by O. von Hinüber and K. R. Norman, Pali Text Society, Oxford, 1994.
- Daśavaikālika-sūtra und -niryukti*, by E. Leumann, *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 46, pp.581–663.
- Daśakālikasuttam with Cuṇṇi*, ed. by Muni Puṇyavijaya, Prakrit Text Society Series 17, Ahmedabad, 1973.

〈キーワード〉 身口意, tri-yoga, Sāmāiya, panca Mahavvaya, *Dasaveyāliya-suttta*, *Dhammapada*, ジャイナ教古聖典, Cūrṇi

(大正大学非常勤講師)